

雪の中、東京から萩市・松陰先生の故郷へ。



松下村塾とは、幕末(江戸時代末期)、身分に関係なく学べる私塾。吉田松陰先生が主宰した松下村塾は、2年わずかの期間であったが、たくさんの若者に火をつけた。ここで学んだ塾生たちは、志高く行動する若者に育ち、長州という藩にとらわれず、やがて日本の歴史を動かすようになった。



↑ 松陰神社・上田俊成宮司による講義



↑ いつか、白熱する

雪化粧された松下村塾



雪の降る中でも、当時は暖房無しで勉強に励んだ…(当然)

8畳の空間に上がり(特別許可)、身震いし、感じる…。

日本ベンチャー大学の原型ともなった萩の松下村塾。その本質を掴むため、1期生たちに続き今年も2期生たちは松下村塾合宿に向かった。松下村塾は叔父の玉木文乃進先生が始めたもので、松陰先生は3代目の主宰者。今日知られるのが右の写真の建物で松陰先生が主宰した場所である。わずか2年少々で、松下村(まつもとむら)の近くに住む若者が集まって学んでいる。一般的に寺子屋では「読み・書き・そろばん」を学ぶが、ここでは孔子の講義が主で、塾生同士で「これからの日本をどうするか」という題材で毎日深く議論がされた。身分を問わず、誰でも入塾できたのが当時としては珍しい。もちろん無料(それどころか、塾生たちのためにご飯まで用意される日もあった)。前置きが長くなったが、これらのことを現地現場で何を感じるのか、そんな講釈抜ききの1泊2日の合宿だった。特別許可で宮司に8畳の間に上がらせていただいた時は全員身が震えた。一緒に参加いただいた経営者の方々との時間の共有も何よりの刺激となった。また、日本ベンチャー大学を全国に分校を創る、という案もここでまとまった歴史的な日となった。

朝まで語る？ 熱い懇親会…

→萩の民宿で懇親会を。膝と膝を突き合わせて、ベン大生と経営者が熱く語る恒例の懇親会となった。寒い夜も吹き飛んだ。



↑ 山近理事長による檄(げき)が炸裂!



日本を
変えよう

梅地和幸先生の講話

文化映像麟駆(リンカ)代表
月刊松下村塾編集長



↑ 野山獄跡。ここで松陰先生は2度ほど囚われている。絶望の淵に囚われた人たちに「教える」ということを実践した地でもある。



↑ 松下村塾から徒歩10分に団子岩がある。ここに杉家墓所や生誕地がある。



↑ 松陰先生生誕地。ここから萩城下が一望できる。杉家の間取りが残っている。